

睥の語源について (7)*

土屋 涼一¹⁾

要約：アリストテレス『動物誌』に「いわゆるパンクレアス」という言葉をみてから古代医学の探訪は、今もインドネシアに在る鶏の睥による占い以外は、全く徒勞であり、またアリストテレスが睥を知っていたとは思えなかった。彼の著作と学園を引き継いだのは最も忠実であったテオプラストスであった。彼は学頭として37年間活躍したが、アテナイ市民より信頼され、多くの学生が教育をうけ学園は発展した。その頃エジプトではプトレマイオス王朝の創成期、アレクサンドリアでは、ヘロピロスが王の支援を受け、人体解剖学が極められた時であった。ヘロピロスの睥についての情報は、ストラトンから得たであろう。テオプラストスの著作リストの中に『アリストテレスの動物誌1~6巻からの抜粋』があり、『動物誌』の「いわゆるパンクレアス」とその前後の文章が、テオプラストスによって改竄されたことを示唆するものである。

Key words：アリストテレス『動物誌』、鶏睥の占い、テオプラストス、ヘロピロス

はじめに

アリストテレスの『動物誌』に、医学史上初めて記載された「パンクレアス」という言葉があるので、アリストテレス以前における此の言葉の出所背景を探したが、見出せなかった。ただメソポタミアに始まった動物の内蔵をみて占うト占術はギリシアを含めた地中海沿岸諸国に広がりローマ時代まで続いたといわれるが、現在もインドネシア地方で鶏を開腹して十二指腸を持ち上げ睥を透かし視て占うことが行われており、透かしみる睥の美しさに、古代ギリシア人が「カリクレアス（美しい肉）」と呼んだのかもしれない¹⁾。しかしながら人間の睥は後腹膜腔に固定されており、後腹膜組織より剝離しない限り、鶏のように十二指腸と共に持ち上げられるものではない。人間の睥が動物のカリクレアスと同じものであるらしいと認識されたのは、人体の解剖が行われたアリストテレス死後のエジプトのプトレマイオス王朝創成期以後であろうと推測されるのである。したがって『動物誌』における「い

いわゆるパンクレアス」という語とその前後の文章はアリストテレスの死後、その弟子たちによって追加されたものであろうと考えられ、まずはアリストテレス著作の運命を追求することにする。

I. アリストテレス著作の運命

1. 『動物誌』の底本

島崎²⁾によれば、アリストテレス『動物誌』の原本にはギリシア語原文の手稿本と出版本があり、手稿本として最も古いのが12~3世紀、他は14~5世紀のもとのとされ、全部で5種の本がある。出版本としては、15世紀終わりに最初のギリシア語原文の基準となったアルドゥス版から始まり、16世紀に6版、17世紀2版、18世紀1版、次いで19世紀に5版が出版された。その1つがベッカー版ベルリン1831年であり、現今アリストテレスの文章を引用する場合、本書の頁数、左右欄別、行数を基準にすることになっている、そして20世紀になってデイトマイア版ライプツィヒ1907年が出版された。これは島崎が底本とした²⁾もので原文全10巻、手稿本の徹底的照合と多くの原文改変の提案を特徴としているという。筆者が所有するのは、ロエブ古典文庫ハーバード大学出版で、動物誌第1巻から6巻までA.L.ベック、第7巻から10巻までが

* On Etymological Study of the Pancreas

1) 医療法人田上病院顧問（長崎大学・島根医科大学名誉教授）（〒851-0251 長崎市田上2-15-14）

D. M. バルメによって編集と英訳がなされ1965年から1991年の間に刊行された。これまでに入手できる資料をよく網羅し、整理した最新の成果であるとされている³⁾。

以上われわれが検討の対象としている『動物誌』は12, 3世紀から14, 5世紀にわたって出版された手稿本、出版本を基とし、徹底した照合と改変を受けた20世紀の出版本である。

2. 『動物誌』の特性

『動物誌』は人類の動物学的知識を初めて学問的体系に集録した大著で、全10巻になっている。第1~4巻は始めに動物学全般の研究法の見通しを示しているが、それ以後は主として動物体の諸部分を比較解剖学的に記述しながら、分類と形態の大綱を述べ、生理に言及したもので、「動物部分論」の序論とみられる。第5, 6巻は各動物の生殖発生に関する詳論で「動物発生論」の序論といえる。第7巻は、元は第9巻とされたもので人間の発生論であり、一部は「動物発生論」の文と平行し、多くは『ヒポクラテス全集』(SIC)からとったものと考えられ、その真偽が疑われている。第8, 9巻は動物生態学および心理学で、獣医学も含まれている。第9巻も疑う人がいるが、第10巻は明らかに後世の人が追加したもので、人間の不妊症の問題を取り扱った、きわめて特殊なものである。

本書はアリストテレスの他の著書と比べると、著しく記載的であり、論理的に精密であるが、思弁哲学的傾向の少ない平坦な客観的叙述である。本書は講義の草稿または筆録の類いであつたらしく、文章は荒削りで彫琢にむらがあり、重複や単なる注解に過ぎぬような挿入句は主題からの逸脱が目立ち、そのうちのあるものは、明らかに後世の修正や加筆、筆写の際の誤りとされている、と述べている³⁾。

一方、堀田⁴⁾はアリストテレスの著作の全般的特性として大部分が講義用の原稿で、アリストテレスはその中にいろいろな問題についての見解を書き込んだようである。現存の著作は後代の人がそれを筆稿し編集したものであるが、その編集者は、著者に対する尊敬の念を抱きながら仕事をすすめ、小さな紙切れでもおろそかにせず丁寧に処置して、現存のものになった。またアリストテレスが付けたと思われるタイトルは『トピカ』、『ニコマコス倫理学』と『政治学』だけで、その他は、彼の死後、原本が整理され、筆写され編集され、タイトルもそのときにつけられたものである、と述べている。

3. アリストテレスの直接の二弟子

アリストテレスの直接の弟子はエウデモスとテオブ

ラストスの2人で、当然師の草稿を世話したといわれ、エウデモスは特に自然学と論理学に関する著作を扱ったという。アリストテレスの死後、テオプラストスが学園リュケイオンを引き継いだ。その後まもなくエウデモスは故郷のロードスに帰ったが、その時何編かのアリストテレスの草稿の写本を持って帰った。その後ロードス出身の哲学者達の著作にはアリストテレスについての記述がみられ、エウデモス以来伝統的にロードスがアリストテレス研究の中心となった。

もう1人の弟子テオプラストスは、アリストテレスの死後リュケイオンを引き継ぐと同時に師の書物も相続した。テオプラストスは学頭として師の創始した学園を37年間見事に管理運営し多くの学生を教育した。また師の原稿を当然大切に保存し整理し、あるいは教育の為に編集し写本もしたと思われる。彼の弟子たちアリストテレス学派(逍遙学派)ストラトンやその後継者アリストン等もアリストテレスやテオプラストスの写本のいくらかはもっていたであろう。時にエジプト王プトレマイオスはテオプラストスをアレクサンドリアに招いた。しかし彼は行けなかったので、代わりにストラトンとデメトリオスがアレクサンドリアにおもむいた。ストラトンは王子フィラデルフォスの教育を担当し、デメトリオスのほうはアレクサンドリア図書館設立に働いた。後に王子はこれらの逍遙学派を通じてできるだけ多くのアリストテレスの著作を集める努力をした。テオプラストスは自らの死が近づいた時、師が残した著作と自分の著書を合わせすべてネレウスに譲渡した。テオプラストスが死ぬとネレウスはすぐにアテナイを去り、故郷スケプシスに帰った。ネレウスは自分の相続した書物の大部分をアレクサンドリア図書館に売ったか贈ったが、しかし尊敬するアリストテレスの草稿は手許に残し故郷に持ち帰った。結局この部分は以後200年の間眠ることになった⁴⁾。

4. アテナイ、ローマ、アレクサンドリア

前1世紀初めのアテナイはアリストテレス哲学の歴史に決定的な意味を与える舞台となった。すなわち富裕なアテナイ市民のアペリコンは愛書家でネレウスの所持していた著書を含めテオプラストスの写本やアリストテレスの著作も多数購入所持していた。ところが当時アテナイはミトリダテス戦争に参加、ローマと戦って破れ、将軍であったアペリコンも死亡した。ローマの将軍スラは戦利品として多くの美術品の他にアペリコンの大量の図書をローマに送った。スラ以外にもギリシア最良のルクルスも多くの図書をローマに送ったが、更に学者ティラニオンを捕らえかつ厚遇した。ルクルスと共にローマに来たティラニオンは図書

収集に努力し3万巻の図書を集めたとされる。その頃キケロはティラニオンと交友があり、アリストテレスの草稿を読んだであろうとされている。その後ティラニオンはスラの蔵書も保管することになった。そこで弟子アンドロニコスに出版計画を実行させたと推測される。アンドロニコスの出版こそ後世のアリストテレス哲学進展の入口を開いたものと言える⁴⁾。

アンドロニコスの経歴についてはほとんどわかっていない。ただ彼はロードスで教育を受けた学者ということだけである。前述のごとくロードスはエウデモス以来アリストテレス研究の伝統がまだ生きていた。その出身者がたまたまローマでアリストテレスの講義ノートに出会ったということは、まことに僥倖というよりほかはない。彼がアテナイで逍遥学派の第11代学頭だったとの説があるが真実でない。何時彼はローマに来たかであるが、キケロは彼を知らないで、恐らくキケロの死後に来たのであろう。したがって出版の時期も前40~20年の間であろう⁴⁾。

一方アレクサンドリア図書館には、テオプラストス→ネレウス→図書館の経路と、テオプラストス→ストラトン・デメトリオス→アリストン→図書館の経路の草稿と、図書館が独自で集めたものが一緒になり、これらがアリストンによって整理され、在庫目録が作られた。この目録をディオゲネス・ラエルティオスが写したのである。残念ながらアレクサンドリア図書館の大部分の図書は前47年の失火によって消失した。この頃にはローマでアンドロニコスが出版したアリストテレス著作集が研究されており、アレクサンドリアにて散逸された図書は放置されてしまった⁴⁾。

一方、田中美知太郎⁵⁾は論説「アリストテレスの思想と生涯」の中でアリストテレス著作の運命について言及しているが、テオプラストスとネレウスについては論じているけれども、もう1人の弟子エウデモスや、テオプラストスが自分の代わりにプトレマイオスの下に送ったストラトンやデメトリオスについては言及していない。しかしアリストテレス著作とテオプラストス、ネレウスおよびその後継者とのことについて、彼はストラボンの風土記 (Geography) の第13巻の記事を引用しているが、もしストラボンの記事が事実であれば、アリストテレスの書物は前287年のテオプラストスの死後およそ200年、辺境に隠されていて、スラがローマに帰還した前83年以後にようやくアンドロニコスの手に渡り出版されることになったのであるとしている。さらにアンドロニコスは雑然たるアリストテレスの原稿を内容別に分類し、これを一定の順序に従って配列したという⁵⁾。

5. 2・3世紀と5・6世紀の著書目録

田中は5・6世紀のものと思われるヘシュキオスの『オノマトロゴイ』(名辞集)という字書において、アリストテレスの項に著書目録として187の書名がかかげられていることを紹介し、これを2・3世紀ディオゲネス・ラエルティオスの『哲学者列伝』⁶⁾にあげているアレクサンドリア図書館のアリストテレス著書目録の143の書数と比べ44ほど多いことを指摘した。両者ともに最初の135番目までは大体において一致するが『形而上学』の書名がヘシュキオスにあって、ディオゲネスにないことが著しい相違としている。ところで動物に関する著作となると、ディオゲネスでは

- 103 動物について 9巻,
 - 106 合成的動物について 1巻,
 - 107 神話上の動物について 1巻
- であり、一方ヘシュキオスの方は、
- 155 動物誌 10巻
 - 156 動物の動について 3巻
 - 157 動物を構成する諸部分について 3巻,
 - 158 動物の生成について 3巻

となっており、ついでながら1831年ベッカー版編集以来の伝統的な編集順序に基づく動物関係書類は、

- 動物誌 10巻
- 動物の諸部分 4巻
- 動物の動きについて 1巻
- 動物の進歩 1巻
- 動物の生成 5巻

となっている⁷⁾。

ディオゲネスの103の‘動物について’はその他の目録の‘動物誌’と同じタイトルであるが巻数がディオゲネスでは9巻で他は10巻である。これ以外の‘合成的動物について’や‘神話上の動物について’というディオゲネスの書名は他の目録にはない。ヘシュキオスの書名はベッカーに全てあるが、巻数が「動物誌」以外では一致しない。そしてベッカーには‘動物の進歩’が増えている。以上時代を変えたアリストテレスの著書目録では著書数に変化がみられるが、『動物誌』に関しては、巻数が違うけれども古い目録から存在していたのである。

II. アリストテレスとテオプラストス

紀元前335年以来アテナイで評判の高い学園リュケイオンを運営し、マケドニア政府の応援や多くの門下生に支えられて波瀾のない生活をおくってきたアリストテレスであったが、紀元前323年秋東方遠征中のア

レクサンドロス大王急死のしらせから事態は急変した。それまでマケドニアの支配をうけてきたアテナイ市民の間に反マケドニア感情が高まり、革命運動が燃え上がった。アテナイ市民はマケドニア政府やその総督との関係からアリストテレスを疑惑の目でみるようになり流罪で訴えるにいたった。アリストテレスはアテナイを出る決意をし、学園の全ての財産と手書きの一切の原稿を、過去25年間研究や行動を共にしてきた親友テオプラストスに譲り、エウボイア島カルキスの母の実家に退いた。そして翌年胃の病にて世を去った⁸⁾。

テオプラストスがアリストテレスより学園リュケイオンを譲り受けたのは、彼が48歳の時であった。以来37年間学頭として学園の管理運営、教育研究の中心人物として活躍した。テオプラストスの死後約400年経って刊行されたディオゲネス・ラエルティオスのギリシア哲学者列伝の第5巻にアリストテレスやテオプラストスなどアリストテレス学派の人物の生涯が記載されている。それによると、テオプラストスは紀元前370年レスボス島エレスソスで生まれた。彼は生地でアルキッポスの教えを受けたが、やがてアテナイに行きプラトンの弟子になり、そしてプラトンの死後アリストテレスの弟子となった。アリストテレスは紀元前384年生まれであり、テオプラストスは彼より14年若かった。しかし2人の間柄は同僚の関係にあり、互いに深い愛着を感じていた。テオプラストスの本来の名はチュルタモスであったが、語り口に神的な響きがこもっていたのでアリストテレスがテオプラストスと名前を変えてやったのである。アリストテレスは37歳で結婚したが、テオプラストスは終生独身であった。そしてアリストテレスの死後その息子ニコマコスを養育した。テオプラストスは大変聡明で勤勉な人であった。また親切で学問好きな人であったので、ブトレマイオス一世は自分の息子の家庭教師に彼を招いた。これは実現しなかったが、彼は愛弟子ストラトンを差し向けている。テオプラストスはアテナイ人達から非常に好意をもって迎えられていた。彼の講義には2千人にも上る学生達が集まった。彼は85歳の高齢で死んだが、全市民がこぞって墓場まで歩いて見送ったとのことであった⁹⁾。

テオプラストスは恩師の草稿をさぞかし大切に保管したことであろう、また自らも多くの著書を残したがその執筆の合間に師の原稿を整理し編集し、学園や門弟の研究、教育の為に写本も行ったことであろう。テオプラストスよりも29歳若いエピクロスは35歳の時にアテナイで自らの学派を創設したが、エピクロスの書

簡にはアリストテレスの『分析論』や『自然学』、『天体学』、『倫理学』にも言及していたし⁴⁾、学園内でもストラトンがアリストテレスの文献に精通していたので、早い時期から写本が行われ研究されていたのであろう¹⁰⁾。彼は遺言状を残していた。そこには学園、庭園、神域および使用人などについて、将来にも及ぶ実細に細々した配慮をみせているほかに、「私の所蔵する書物はすべてネレウスに与える」とあった⁹⁾。おそらくテオプラストスは遺言を書いた時点では、師アリストテレスの草稿はすべて目を通し整理し、ネレウスに譲渡する以前に、学園に必要と思われる範囲の師アリストテレスの著作のコピーを済ませていたのではないであろうか？

III. テオプラストスの著書目録

ディオゲネス・ラエルティオス著ギリシア哲学者列伝には第5巻第1章がアリストテレス、第2章がテオプラストスであり、それぞれの生涯、業績や評判などが書かれているが、さらにおのおの業績目録が記載されている。アリストテレスの方は論文、書簡および叙事詩を含め156編あるが、問題としてきた書物は目録の第102番目の『動物について9巻(Peri zoon 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9)』であり、因みにパンクレアスの言葉があったのはその第3巻である。一方テオプラストスの方では少数の書簡を含め225編の目録が記載されている。このうち動物に関する著書と思える題目を掲載順にあげると、

- 1) 同じ種に属する動物の声の相違について 1巻
- 2) 密集して出現する動物について 1巻
- 3) 咬みついたり、刺したりする動物について 1巻
- 4) 嫉妬すると言われている動物について 1巻
- 5) 陸地に生息する動物について 1巻
- 6) 色を変える動物について 1巻
- 7) 穴ごもりする動物について 1巻
- 8) 動物について(Peri zoon 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7) 7巻
- 9) アリストテレスの『動物誌』からの抜粋(Epitomòn Aristotélus peri zoon 1, 2, 3, 4, 5, 6) 6巻
- 10) 動物の知能と性格について 1巻
- 11) 動物について(Peri zoon)

以上11編の書名をみるが、8)と11)とは書名は全く同じ「動物について」であるが一方は巻数が7であるのに他方には巻数は書かれていない(図1、図2および図3参照)。とにかくテオプラストスは植物の研究を盛んに行ったとされているが、動物にも大いに研究し教育もしたものと考えられる。注目すべきは9)であっ

Ἀλλης τεχνῶν συναγωγῆς α' β'.
 Μεθοδικὸν α'.
 Τέχνης τῆς Θεοδέκτου συναγωγῆ α'.
 Πραγματεία τέχνης ποιητικῆς α' β'.
 Ἐνθυμήματα ῥητορικὰ α'.
 Περὶ μεγέθους α'.
 Ἐνθυμημάτων διαίσεις α'.
 Περὶ λέξεως α' β'.
 Περὶ συμβουλίας α'.
 25 Συναγωγῆς α' β'.
 Περὶ φύσεως α' β' γ'.
 Φυσικὸν α'.
 Περὶ τῆς Ἀρχυτείου φιλοσοφίας α' β' γ'.
 Περὶ τῆς Σπευσίππου καὶ Ξενοκράτους α'.
 Τὰ ἐκ τοῦ Τιμαίου καὶ τῶν Ἀρχυτείων α'.
 Πρὸς τὰ Μελίσσου α'.
 Πρὸς τὰ Ἀλκμαίωνος α'.
 Πρὸς τοὺς Πυθαγορείους α'.
 Πρὸς τὰ Γοργίου α'.
 Πρὸς τὰ Ξενοφάνους α'.
 Πρὸς τὰ Ζήνωνος α'.
 Περὶ τῶν Πυθαγορείων α'.
 Περὶ ζῶων α' β' γ' δ' ε' ς' ζ' η' θ'.
 Ἀνατομῶν α' β' γ' δ' ε' ς' ζ' η'.
 Ἐκλογὴ ἀνατομῶν α'.
 Ὑπὲρ τῶν συνθέτων ζῶων α'.
 Ὑπὲρ τῶν μυθολογοιμένων ζῶων α'.
 Ὑπὲρ τοῦ μὴ γεννᾶν α'.
 Περὶ φυτῶν α' β'.
 Φυσιογνωμονικὸν α'.

* Περὶ μεγέθους, between two books on Enthymemes, must be on Degree, the topic of μάλλον καὶ ἧττον (§ 80). "Degree" is Cope's term (see his *Introduction to Aristotle's Rhetoric*, p. 129, where he cites Aristotle's own distinctions in *Rhetoric*, II, cc. 18, 19).

80 Another Collection of Handbooks, two books.
 Concerning Method, one book.
 Compendium of the "Art" of Theodectes, one book.
 A Treatise on the Art of Poetry, two books.
 Rhetorical Enthymemes, one book.
 Of Degree,* one book.
 Divisions of Enthymemes, one book.
 On Diction, two books.
 Of Taking Counsel, one book.
 A Collection or Compendium, two books.
 90 On Nature, three books.
 Concerning Nature, one book.
 On the Philosophy of Archytas, three books.
 On the Philosophy of Speusippus and Xenocrates, one book.
 Extracts from the *Timaeus* and from the Works of Archytas, one book.
 A Reply to the Writings of Melissus, one book.
 A Reply to the Writings of Alcmaeon, one book.
 A Reply to the Pythagoreans, one book.
 A Reply to the Writings of Gorgias, one book.
 A Reply to the Writings of Xenophanes, one book.
 100 A Reply to the Writings of Zeno, one book.
 On the Pythagoreans, one book.
 102 On Animals, nine books.
 Eight books of Dissections.
 A selection of Dissections, one book.
 On Composite Animals, one book.
 On the Animals of Fable, one book.
 On Sterility, one book.
 On Plants, two books.
 109 Concerning Physiognomy, one book.

図1 Loeb Classical Library の Diogenes Laertius 著

Lives of Eminent Philosophers, R. D. Hicks 英訳の第V巻 第1章のP464~475にアリストテレスの書簡や詩を含め、計156の著作物のリストがあり、その102番目に左欄のギリシア語では、PERÌ ZŌON α' -θ' とあり、右側英訳文では On Animals 9巻となっている(下線の部)。105番と106番に動物に関する書物が1巻ずつある。左欄のギリシア語の頭にあるアラビア数字はパラグラフの数であり、リストの数とは関係はない。右欄の英語の頭にある数字は筆者がつけたリストの順番を示す数字である。

て、明らかに「アリストテレス『動物について』の6巻の抜粋」と記載されており、テオプラストスがアリストテレスの草稿を読み概要を作り研究および教育に利用したのにちがいないと思われる。なお賀来彰俊の訳では図3のように「アリストテレスの『動物誌』からの抜粋、6巻」となっているが、原文では第1巻から第6巻までの各巻を挙げて6巻となっているので、当然第3巻も含まれる。またテオプラストスが手にしたアリストテレス動物誌の草稿は、そのときは6巻までしかなかったのであろう。テオプラストスが死んだ後、ディオゲネスが哲学者列伝を書いた紀元2・3世紀にはこれが9巻に増えているが、テオプラストス以外の弟子が追加したのかもしれない。テオプラストスには師の草稿を整理し、訂正または追加し直す時間は十分あったと思われ、さらに彼を心から尊敬し慕っていた逍遥学派の人々は彼がアリストテレスの草稿を改竄しても、これに異を唱えるものはいなかったであ

らう。

IV. プトレマイオス王朝初期のアレクサンドリア

エジプトを征服した25歳の若きアレクサンドロス大王は、エジプトの地中海岸ナイルのデルタ地帯西部に理想的な港町、自分の名前を冠したアレクサンドリアを作ることを決定、定礎は紀元前331年4月7日に行われたと言う。大王の死後、将軍プトレマイオスソーテルは、大王の遺志を継いでアレクサンドリアを首都と定め、大王が王子の時の家庭教師アリストテレスから、王子の学友であったソーテルも教えを受けたので、アリストテレスの影響があったのであろう、学問興隆を建国の大方針としてアレクサンドリアを学問の府とすることにした。研究施設、図書館、博物館、天文台等の設立とともに各方面の優れた学者が集められ

- 'Ομηρικὸς α'.
- Περὶ ἄρκου α'.
- Παραγγέλματα ῥητορικῆς α'.
- Περὶ πλοῦτου α'.
- Περὶ ποιητικῆς α'.
- Προβλήματα πολιτικά, ἠθικά, φυσικά, ἐρωτικά α'.
- 48 Προοιμίον α'.
- Προβλημάτων συναγωγῆς α'.
- Περὶ τῶν προβλημάτων φυσικῶν α'.
- Περὶ παραδείγματος α'.
- Περὶ προθέσεως καὶ διηγήματος α'.
- Περὶ ποιητικῆς ἄλλο α'.
- Περὶ τῶν σοφῶν α'.
- Περὶ συμβουλῆς α'.
- Περὶ σολοικισμῶν α'.
- Περὶ τέχνης ῥητορικῆς α'.
- Περὶ τεχνῶν ῥητορικῶν εἶδη ιζ'.
- Περὶ ὑποκρίσεως α'.
- Ἵπομνημάτων Ἀριστοτελικῶν ἢ Θεοφραστείων α' β' γ' δ' ε' ς'.
- Φυσικῶν δοξῶν α' β' γ' δ' ε' ς' ζ' η' θ' ι' ια' ιβ' ιγ' ιδ' ιε' ις'.
- Φυσικῶν [δοξῶν] ἐπιτομῆς α'.
- Περὶ χάριτος α'.
- [Χαρακτῆρες ἠθικοί.]
- Περὶ ψεύδους καὶ ἀληθοῦς α'.
- Τῶν περὶ τὸ θεῖον ἱστορίας α' β' γ' δ' ε' ς'.
- Περὶ θεῶν α' β' γ'.
- Ἱστορικῶν γεωμετρικῶν α' β' γ' δ'.
- 49 Ἐπιτομῶν Ἀριστοτέλους περὶ ζῴων α' β' γ' δ' ε' ς'.
- Ἐπιχειρημάτων α' β'.
- Θέσεις γ'.
- Περὶ βασιλείας α' β'.
- Περὶ αἰτιῶν α'.

498

- 112 Concerning Conversation, one book.
- On Taking an Oath, one book.
- Rhetorical Precepts, one book.
- Of Wealth, one book.
- On the Art of Poetry, one book.
- Problems in Politics, Ethics, Physics, and in the Art of Love, one book.
- Preludes, one book.
- A Collection of Problems, one book.
- 160 On Physical Problems, one book.
- On Example, one book.
- On Introduction and Narrative, one book.
- Another tract on the Art of Poetry, one book.
- Of the Wise, one book.
- On Consultation, one book.
- On Solecisms, one book.
- On the Art of Rhetoric, one book.
- The Special Commonplaces of the Treatises on Rhetoric, seventeen books.
- On Acting, one book.
- 170 Lecture Notes of Aristotle or Theophrastus, six books.
- Sixteen books of Physical Opinions.
- Epitome of Physical Opinions, one book.
- On Gratitude, one book.
- [Character Sketches, one book.]
- On Truth and Falschood, one book.
- The History of Theological Inquiry, six books.
- Of the Gods, three books.
- Geometrical Researches, four books.
- 179 Epitomes of Aristotle's work on Animals, six books.
- 180 Two books of Refutative Arguments.
- Theses, three books.
- Of Kingship, two books.
- Of Causes, one book.

499

図2 図1と同書、同巻、第2章のP488-503にテオプラストスの著作のリストがあり、計225である。その179番目(下線の部)が、「アリストテレス動物誌6巻の抜粋」である。

優遇された。のみならず大灯台をたて、港にはドッグや倉庫を備え、地中海貿易の中心となるべく建設がすすめられた。かくてアレクサンドリアの文化活動は隆盛となり、以来3世紀にわたるヘレニズム時代の文化の一大中心地となった¹¹⁾。医学においても系統的人体解剖の樹立という画期的なことが行われ、人体の内部が明らかになって多くの発見がなされた。

この医学の革命的事業を成し遂げた中心人物がヘロピロスである。生、没年はおおよそ紀元前330~260年頃と考えられている。いつアレクサンドリアにきたか不明であるが、プトレマイオス一世が有能な学者を招き優れた研究遂行に必要な十分な援助を提供する政策に惹き付けられたのであろう。

彼の著作はほとんど失われてしまっている、そして痔について記載したものは全くない。しかし後世の著作物の中にその業績が紹介されている。とりわけガレノス(紀元129~201年頃)は膨大な著作物のあちらこちらに彼の業績を紹介している。ガレノスの論文のなかで、1カ所ヘロピロスとパンクレアスとの関係を示

唆している文章がある。それは『種子について(Peri Spermátos, De semine)』第2巻 第6章646頁にある。翻訳すると「胃からの分泌液と肝からの胆汁液と、そしてさらにそこにある腺群から唾液に似た粘稠な液とが腸の中に整然と注ぐ。これらの腺群について解剖学者の誰もが研究しようとしなかったが、ヘロピロスとエウデムスが初めて取り上げ検討した」というものである。この文章にある“腺群”が“パンクレアス”を意味することは現代のわれわれには容易に理解できるが、原文には“そこにある adénon”とあるのみで、“パンクレアス”とは記載していない。ガレノスはほかの論文では明らかに“パンクレアス”の言葉を使っているのに、何故上記の文章にこの用語を使わなかったのであろう。著者はこの問題にぶちあたって、ガレノスの原著を自ら読む必要性を感じ、独学で古代ギリシア語の勉強をはじめた。ほぼ2年経った今日もなお、原文を前にすると翻訳に四苦八苦の状況であり、いつ上記の難問を解くことが出来るかわからないが、とにかくやってみようと思意している。

#102 動物誌	9巻
#103 解剖図録	8巻
#104 解剖図録よりの抜粋	1巻
#105 合成的動物について	1巻
#106 神話的動物について	1巻

#41 同じ種に属する動物の声の相違について	1巻
#42 密集して出現する動物について	1巻
#43 咬みついたり、刺したりする動物について	1巻
#44 嫉妬するといわれている動物について	1巻
#45 陸地に生息する動物について	1巻
#46 色を変える動物について	1巻
#47 穴ごもりする動物について	1巻
#48 動物について	7巻
#179 アリストテレスの「動物誌」からの抜粋	6巻
#187 動物の知能と性格について	1巻
#225 動物について	

図3 図1, 図2に関する和訳

加来彰俊訳：ディオゲネス・ラエルティオス著 ギリシア哲学者列伝(中) 岩波書店, 東京, 1996年, アリストテレス P35-36, テオプラストス P53, 62, 66より引用。

著者は, 2世紀の終わり頃ないし3世紀前半の早い時期の人といわれる。

ヘロピロスが何時アレクサンドリアに来て, 活動したかは不明であるが, プトレマイオス一世ソーテルと二世フィラデルフスが死刑囚をヘロピロスに与え生体解剖を許したとされている¹²⁾。プトレマイオス一世ソーテルの治世は紀元前323~283年, 息子二世フィラデルフスのそれは紀元前283~246年であり, テオプラストスがリュケイオンの学頭であった期間は紀元前323~286年の37年間, 次のストラトンが286~268年の18年間であった⁹⁾。

ヘロピルスは一時アテナイで開業したことがあるが, 最も活動したのはアレクサンドリアにおいてであり, テオプラストスがアテナイで学頭していた時と一致するので, テオプラストスは弟子ストラトン等を通じて逐一報告を受け熟知していたであろう。またヘロピロスと同時代アレクサンドリアにて解剖のみならず生理学的研究を盛んに行ったエラシストラトス(c.315~c.240BC)も, もっぱらアレクサンドリアにて活躍したが後に, テオプラストスの弟子になったと言われており⁹⁾, この人からも直接ヘロピロスの業績を聞く機会があったであろう。

おわりに

アリストテレスの『動物誌』にパンクレアスとその前後の文章を追加挿入したのは, テオプラストスであると思われる。これが真実であるとするれば, 改竄はテオプラストスの学頭時代に行われたので紀元前3世紀始めであろう。

参考文献

- 1) Sachs M, Mulvahill M, Dapawole YL : The Pancreas of Sacrificial Animals as an Object of Divination for the Indigenous Peoples on the Island of Sumba, Indonesia. *Pancreatolgy* 5 : 486-491, 2005.
- 2) 島崎三郎訳：アリストテレス動物誌(上), 凡例3, 岩波書店, 1998.
- 3) 島崎三郎訳：アリストテレス動物誌(下), 解説353~379, 岩波書店, 1998.
- 4) 堀田 彰：アリストテレス, 32-52, 清水書院, 1979.
- 5) 田中美知太郎：アリストテレスの思想と生涯. アリストテレス世界の名著第8巻, 田中美知太郎責任編集, 35-47, 中央公論社, 1979.
- 6) デイオゲネス・ラエルティオス：アリストテレス：ギリシア哲学者列伝(中), 加来彰俊訳, 29-39, 岩波書店, 1996.
- 7) AL Peck trans. & edit. : The traditional order of the works of Aristotle in History of Animals, Book I-III, Loeb Classical Library, ci-civ, Harvard University Press, Cambridge, 1993.
- 8) 今道友信：アリストテレス, 159-160, 講談社, 2004.
- 9) デイオゲネス・ラエルティオス：アリストテレス：ギリシア哲学者列伝(中), 加来彰俊訳, 45-78, 岩波書店, 1996.
- 10) 今道友信：アリストテレス, 66, 講談社, 2004.
- 11) 村田数之亮, 衣笠 茂：世界の歴史4 ギリシア, 388, 河出書房新社, 1995.
- 12) Bynum WF, Bynum H edited : Dictionary of Medical Biography. Vol. 3 H-L, 637-639, Greenwood Press, London, 2007.